

東京都スクールカウンセラー（公認心理師／臨床心理士）

金屋光彦

天使が悪魔に変わるとき

— 子どもたちの自己肯定感を考える その6 —

1 欲望と生き方

わたしたちの行動の源は、欲望である。様々に抱く欲望を、法に背かず、他の人々と折り合いをつけながら、どう満たしていくのか!? そこに、その人独自の生き方が現れる。生きる難しさや楽しさ・喜びといった人生の妙味も、そこにあるといえるだろう。

だが、他人の命を自らの欲望を満たす道具にした悪魔の所業が、神奈川県座間市で発生した。その始まりは、今から2年前の夏の終りだった。

2 2か月間に若者9人を殺害

2017年8月末、「死にたい」とツイッターに投稿した21歳の女性が、返信してきた男の自宅アパートに招かれ、性的暴行の上、惨殺された。その後わずか2か月間に、同じ手口で15歳から26歳までの計9人が次々と殺害された。3人の女子高校生の尊い命も奪われ、高校でSCを行う者として決して見過ごせない事件だった。

彼が卑劣なのは、SNS上で「死にたい」と助けを求める若い女性に対し、「一緒に死にましょう」などと言葉巧みに誘い、近づいたところにある。逮捕後「会ってみると本当に死にたいと思っている人は、一人もいなかった」と供述した。「死にたい」という表明は、「現実が耐えがたい程辛い。助けてほしい」との切実な叫びにほかならない。

3 信じられない

犯罪史上類のない凶悪犯となった白石隆浩容疑者（当時26歳）だが、彼を知る小学校の同級生や担任は、異口同音に「信じられない!」と全国新聞紙上で語る。

「得意なゲームでも勝ちを譲ってくれる気遣いをするので、仲の悪い子はいなかった」、「表情が柔らかく、大きな声であいさつのできる、かわいい子だった」

彼は逮捕時、顔全体を両手で覆った。「あの両手の下に、本当に僕らの知っているたかちゃんの顔があるのだろうか? 何があったか知りたい」

4 理想の家庭が崩壊

彼の家庭は、自動車関連業の父と専業主婦の母、2歳下の妹の4人家族。人気ゲームが揃い、毎日のように訪れる友人に、母親はお菓子をだし、家族全員が笑顔で接してくれたという。「理想的な家庭だった」(小学同級生)。

だが、中学1年で部活をやめ、帰宅後はますますゲームにのめり込む。注意する父親とたびたび衝突し、強制的に父親がプレーカーを切った際には、怒りをあらわにしたという。また、19歳の時、多額のパチスロ資金を母親にせびり、以後関係が断絶した。彼が「綺麗で料理もうまい完璧な人」というこの母親は、彼が高校在学中に妹を連れて家を出、後に父親と離婚する。

5 恐ろしいゲーム脳

日本初のネット外来を2011年に立ち上げた国立病院機構久里浜医療センターの樋口進院長が、東京都のSC連絡会で、依存の実態を話してくれたことがある。

「ネット依存になると、脳の前頭前野の機能が落ちて、欲望や感情のコントロールが難しくなります。自分勝手な言動も目立ち、親とのいさかきも増えます」

6 アイデンティティ拡散も加わる

高校卒業後数年間スーパーで勤務した後、彼は新宿で風俗人材紹介の仕事をしていた。この時、会社が職業安定法違反で摘発され、彼も逮捕される。そして執行猶予付きの有罪判決を受けたのだった。

保釈後、実家に帰った彼はゲームに没頭、「ゲームばかりするな」と厳しく父親に叱られる中で、「生きていても意味がない」と吐露するようになる。自己肯定感も圧倒的に低下し、彼はこの時、アイデンティティ拡散の状態だったといえるだろう。

この状態は、目標を欠く暴発的な行動に出やすい。その上に、欲望が制御できないゲーム脳になっていた彼には、危機介入的な待たなしの支援も必要だったと考えられる。

7 悪魔の心に化する前に——

犯行の1年後、東京立川拘置所で、彼はある雑誌インタビューでこう答えた。

「犯行の理由は、ただただ金銭欲と性欲を満たすため。(中略)被害者の方たちは、最初から欲望の対象で、自分の家族や友人などとは別次元として自分の中で線引きしているので、殺したことへの後悔や遺族に対する申し訳ない気持ちとかは、一切ないです」

微笑みながら語る白石に反省の色は全く見えない、と記者は記している。心理的防衛機制が働いているとしても許容しがたい態度で、まさに悪魔の心である。

「この件では家族に迷惑をかけた。戻れるなら、スーパーのベーカリー部門で働いた時代に戻ってやり直したい」とも語った白石。気遣いのできる優しい心が、悪魔の心に化する前に、ゲーム障害やアイデンティティ拡散状態への適切な支援が必要だったといえる。

今や中高生の93万人がスマホ依存(5年前より41万人増加)とされ、欲望の暴走による破綻を招くリスクは高まっている。またネット依存に陥った者は、自己肯定感が低いことは調査で明らかになっている。

そして何よりこの事件は、今の社会の現実が、本当に心豊かで信頼するに足る世界であるかを、厳しく問うているともいえるだろう。